

〔研究ノート〕

農村に生きる「十字架のない教会」の試み

——「共生庵」の歩みを通して——

荒川 純太郎

はじめに

広島県ほぼ中央部中山間地域に農家と田畑を求めて移住したのは1998年4月のこと。最初は取り急ぎ仮住まい・借家・田畑借地でスタート。そこで1年8ヶ月過ごしたが、仮住まいでは、何をするにも建物や田畑に手を加えるには大きな制約が伴う。本腰を入れて物件を探し始めて、やっと現在の地に建物・田畑・裏山を入手して移住先を決めることが出来た。1999年11月のことである。現在地の広島県三次市三和町敷名に移住した。それまでは本当に自分たちがめざしていることが実行できるか否かを確認するウォーミングアップの期間であった。

I 「共生庵とは」

そこで始めたことは、いわゆる農・自然体験ができる体験型日帰り・宿泊



共生庵全景

キーワード：教会, リトリートハウス, 地球市民共育塾, 開発教育ワークショップ, 田舎暮らし

施設であった。しかし単なる農と自然に触れるだけの場ではなく、そこで学び、教えられた体験を通して他者と出会い、更に自己に新たに出会い直して人間性の回復を目指すというステップが設定されている。ホームページ <http://www.pionet.ne.jp/~kyoseian> には下記のように記されている。

共生庵とは…「農」と「自然」に触れ、学び「人と人との出会い」を求め、自分らしさを取り戻すために「出会いと黙想」のふさわしい環境づくりと「そのためのプログラム」（地球市民共育塾）の提供をめざしている。

共生庵の目的を表すキーワードにこの一農・自然・ひと一が掲げられている所以である。今や地方農村地域では、各地で様々な農自然体験塾のようなイベントが目白押しである。共生庵はそれらとはひと味違うスタンスを持つと自負している。一過性のイベントや、単なる体験型の「いいとこ取り」だけのパターンは避けたいと心がけている。

受け入れは50%の準備をして待つ。残りの50%を来訪者たちで作りあげていくというフィフティ・フィフティの関係性を理想としている。決して「お客」として受け入れず、自然の中で限定された時間と空間を「共有する生活者」として受け入れる。そこでは主体的な希望・願い・動機が求められ、「あなたは何がしたいのですか」と問い、選択する決断を促すのである。

（1）始めた動機は…

1) 「うしろを絶つ」決断

私は日本基督教団の牧師である。教会と契約をむすび、与えられた教会で「牧会」という様々な仕事に携わる。各教派・教団によって異なるが、一定期間の任期が終わると次へ移動していく。私の信念は牧師は一つの教会に余り長く留まるべきではない。10年一区切りで新しい任地に赴くべきだと考えてきた。それが気がつけば13年経過していたので、この年度末をもって辞任したいと辞意を申し出た。教会のためにも転任を申し述べる方がいいと考えた次第である。

それから農村地区への移住先を本格的に探し始めた。思いつきなどでなく、

それまで意識的には少なくとも5カ年位はずっと温めてきた夢である。あそこに廃校がある、ここに廃屋、農家が売りに出された等々情報を得る度に出かけて行っては「いいなあ、いいなあ、こんな所に住めたら」とヨダレを垂らしながら見つめていた。時には既にIターンで入り込んで新しい生活を始めている人を訪ね歩いて泊まり、遅くまで話込んだものだ。

分かったことは「後を絶つ事」をしなければ大きな決断はできず、事柄は成り立たない。もう戻れない道を作らねば少しも前進しない事に気づいた。まだ行く先も分からないのに辞表を提出したという訳だ。

実際に田舎暮らしをしたいと願っても、やってみれば思い知らされることなのだが、思うような物件に出会うことや実現に至ることはかなり難しいことなのだ。結局我々も取りあえずの移住先は小さな農家の「借家・借地」でしかなかった。

2) 「このままでいいのか」と問うたこと

赴任先の教会は色々な意味で大変居心地の良い申し分ないやり甲斐ある働き場であった。だから自分から申し出ないで、続ければまだ当分ずるずる優柔不断のままだっただろう。しかし気がつけばすでに13年経っていた。このまま続けて人生を閉じてもいいのかと自問した時「いやいやそうじゃない、死ぬまでにもうひと仕事したい」との強い思いが湧いてきた。辞任決断を促したポイント・動機であった。

その時実感したことは、55歳という年齢のこと。人生の峠は55歳(?)。この時期を逃せば、この先肉体的にも精神的にも可能性はどんどん狭められていく。今、決断しなければきっと出来なくなるだろうと考えた。

「バケットリスト」と言う言葉がある。共生庵の稲刈りに参加したアメリカ人大学教授が教えてくれた。「日本で念願の稲刈りが実現できてとても感動した、夢が叶えられた。我がバケットリストにあったことだ」と。

これは「死ぬ前にやりたい事リスト」の事。辞書には俗語に“kick the bucket”(バケツをける)と出てくる。「死ぬ、くたばる、往生する」という意味。

それは自殺をする人が吊り下げられた縄に首をかけるために踏み台にするバケツのこと。その上に乗り、意を決する時にバケツを自分で蹴り飛ばす行為が語源となっているという。別名「棺桶リスト」とも呼ばれている。「このままで終わりたいくない。死ぬまでにやっておかないときっとひどく後悔することになる」というマイ・バケツリストに農的暮らしがあったのである。

3) 自給自足を試みたいという願望

動機の根底にあったのは中山間地域の農村で自ら安全な食べ物を作って食べるスローライフをめざしたいという願望だ。これはずーっと秘かに心の底に持続させてきた願いだ。「それにしても何故移住先が農村エリアだったのか」とよく尋ねられることがある。その時は、その背景にある私のアジア体験を語ることにしている。

私は日本基督教団在外教師として東マレーシア・サラワク州（旧ボルネオ島）の少数民族イバン人メゾジスト教会の自立支援に遣わされた経験（1978～1982年）がある。大きく影響を及ぼした貴重な体験は、私の農村志向に一層の拍車を掛けた。

イバン人は熱帯多雨林地帯を網の目ように流れるジャングルの河川沿いにロングハウスを建て共同生活を営む。彼らの大自然と共存する見事なまでのシンプルライフの生き方から、先進国の現代人の都会生活がどんなに歪んでいるかを幾重にも思い知らされた。森はスーパーマーケットのようなものという彼らは、自然から与えられる恵みを大切に、なんでも衣食住に活かして生きるスローライフは衝撃であった。その根底にあるのは大自然への畏敬と謙虚さである。

4) 新しい教会のあり方を田舎で模索したいという挑戦

広島の中で教会牧師と幼稚園園長を務めながら、実に多様な意味で悩み、心病む人に出会ってきた。必要に応じて対応してきたが、いつも大きな限界を感じていた。そこで常に気づかされたことは、心と体のバランスが余りに

も大きく乖離して崩れており、頭でっかち、心でっかちになってしまっている事だった。このアンバランスの修正には、もっと人が自然の中で心や頭はちょっと横に置いてでも、土や水・草木・木々・自然の恵み等に触れて助けを得ることだ。そこから本来の人間らしい感性を取り戻すことが必要ではないかと痛切に思うようになっていた。このことが、共生庵を始める動機に大きく影響している。

自分たちが田舎暮らしをしたいだけでなく、それを必要としている他者と共有することができればという開かれた願いは、当初から重要な要素であった。

牧師としてキリスト教の生き方を通して農村エリアで、すべての人に開かれたリトリートハウス（後述）を作りたい。都会と農村をつなぐために、従来の教会や宣教活動を受け入れつつも、新しい教会のあり方を模索し、広い意味で革新的な宣教活動を展開したいと考えている。

多くのキリスト者から良く問われる。「ここは教会ですか？日曜礼拝は？会員さんは？」と。私が牧師でありキリスト教を公にしながら地域社会で生きているので、ごく素朴な質問が出てくるのもうなずける。

わたしは共生庵のキーワードのひとつに「十字架のない教会」（後述）がある。共生庵を訪問する人が本棚に並ぶ書籍を見たり、出入りする人やその他の展示物から「荒川さんは、もしかしてクリスチャンですか」と問われることがある。すかさず「そう！そうなんですよ！！実は牧師なんですよ」と答える。既成の教会の枠（？）からはみ出しているが、私はこれもまた現代の新しい教会であり、多様な宣教のあり方を試みる現代の宣教活動の最先端を担っているとの自負を持っているつもりである。

最初の頃は知人から「まだ若いのにもう引退して田舎へ引っ込むのか?!」といわれることがあった。誤解である。引退どころか、自分で新しい教会とその活動を開拓し模索している。そもそも「田舎に引っ込む」と言う言葉は田舎の人に対して大変失礼である。むしろそこは引っ込むところではなく、とてつもなく広く多くの恵み・可能性・豊かな自然・人的資源等がある。太平

洋へ悠々と船出するような感じである。わたしはそんな思いをいつも持っている。

Ⅱ 共生庵の概要

ここまで動機・経緯・背景などを通して既に多くの事を述べてきたが、あらためて共生庵の全体像を描き出してみよう。

(1) <地形・位置>

標高340m, 裏山の頂上は400m, 家の前には畑や田んぼ, 裏山には竹林もある。田畑の向こうには美波羅川が日本海へ流れている。我が家の前には兩岸には1000本の桜並木が6キロ余り続く。とても美しい田園風景である。里山を研究しているある大学教授がこのロケーションを見て「ここは典型的な日本の里山原風景だ」と評されたことがある。

広島市内から車で1時間半の広島県中央部に位置する。日帰りが可能な距離である。いつでも行きたいと思うときに出かけられる距離。非日常性を実感出来る都心にはない自然溢れた「異日常性」を備えているところ。何よりも13年間広島市内で育ててきた人間関係が切れない物理的な距離が大切だ。財産らしきものがない我々にとって最大で最強の財産は「人間関係」である。最初から今に至るまで我々を支える不動の基盤はまさにこれで変わることはない。

(2) <建物・施設>

現在の共生庵は古い農家を譲り受けたもの。建物はすべて2階建てで母屋, 別棟・納屋の3棟。広い駐車場付き。大工を入れて大きな改修することなく, そのほとんどがそのまま使用できるという質の良い物



ピザ石窯

件であった。

集落排水が整備されたので、下水に直結するための水洗トイレ工事・風呂・台所などの水回りは専門業者が施行しなければならないので依頼したが、これが最大の出費であった。それ以外必要な改造などは自分で手がけることで済ませてきた。

3棟並ぶ中央は2階建て母屋。大小の部屋が11室あり、堀こたつや囲炉裏も掘ってある。離れの別棟は若い夫婦が住んでいたのか、2階に8畳二間・廊下・トイレ・台所・屋根付きテラスがある。その階下はすべて倉庫・車庫・物置に広く利用できる。この2棟で冬場で20人の宿泊受け入れが可能である。

もう一つ納屋だった建物は、その骨組みは見事でもともしっかりしている。1階は多目的スペースとして会議、研修、パーティ、食事、音楽会、礼拝、ワークショップなど様々に利用されている。その奥には牛が飼われていた土間がある。そこに日本で第1号のロケットストーブ・マスヒーターという200ℓドラム缶で作ったユニークな薪ストーブが設置されている。また木工作業場にも様々な電動工具や大工道具が所狭しとおかれている。

最初に作ったのはピザ石窯。これは実に多くの人々が利用、焼きたての美味を堪能している。炭窯（広島県式改良型2号）は小型だがうまく焼けば150kgの炭が焼ける本格的な窯である。更にツリーハウス・ログハウス・ファミリーコテージ・ファイアプレス・ロケットストーブなどを製作してきた。業者に任せず、講師を呼び、すべて関心ある参加者を募って時間を掛けて手作りしていく。かくて共生庵は多くの付加価値を付けたことになる。

（3）＜名水的生活用水＞

田舎の空き家物件には生活に不可欠な水が年間を通して十分まかなえないところがある。田舎の古民家にはどこにでも湧れ井戸の一つや二つはあるものだが、ここにはない。裏山の斜面から湧き出てくる山水を受けて大きな水槽に貯め、そこからポンプアップされて各箇所へ送られている。経費はモーターの電気代だけ。水道代金は不要である。飲食にも使用するので念のため

水質検査を水博士佐々木健教授（広島国際学院大学学長）の研究室で検査していただく。「軟水の名水」との判定が出た代物。細い水量だが、真夏の多くの来客を迎えても、何とかまかなえている。全くありがたいことである。

（４）＜田畑＞

六反余りの田圃と畑があり、広くてもてあましている。当初五枚の田畑を借用していたが、持ち主からの要請で買い取ることに。ほんの少しの農地があれば十分なのだが、農家でないものが田畑を取得する場合はいろいろな課題がある。先ず農業をやる



桃山学院大学「らぶ&ピース」

意志があるかどうか、農業委員が視察に来る。トラクターやコンバインなどの基本的な農機具があるかどうかもチェックが入る。しかもこの地区では農業のためには五反以上の農地を購入することが当時の条件である。この際入手しておかないと家の前で知らない人にどんどん農薬をまかれたり、思いも掛けないトラブルが生じることになる。コンロに鍋を掛けておいて、ちょっとした具材を目の前の畑に摘みに行くことができるのは、便利で好条件である。という訳で私たちにとっては広すぎる農地を入手する事になった次第である。手におえない草刈りの軽減のためにも、一枚の畑は様々な果樹を植えて果樹園にしている。

化学肥料や各種の化学農薬を使用せず、有機栽培を心がけている。雑草の中にかろうじて実った稲を収穫して食べる。しかもいい加減な野良仕事しかしていないのに、一年分（来客分も含めて）確保して、お米を買うことができないという生活ができるのだ。「自給自足」ということを実感出来る最高に豊かな贅沢な恵みである。

Ⅲ <共生庵のミッション>

以下共生庵の使命 mission を述べながら具体的活動内容を紹介する。

共生庵とは以下のように定義している。

※「農」と「自然」に触れ、学び、「人と人との出会い」を求め、自分らしさを取り戻す「出会いと黙想」の生活体験現場である。

※そのためにふさわしい環境づくりと「そのためのプログラム」（地球市民共育塾）の提供をめざしている。

(1) 「農・土に触れ学ぶ」

稲作，田植え，稲刈り，耕作，草刈，野菜播種，収穫，果樹，ハーブ栽培の手入れなどの農作物栽培。これらの野良仕事が隠されていた人の感性を呼び覚ます。更に日頃食べている野菜などの種・苗・花や実の付き方・味等をあらためて確認したり，新発見したりする。土の中に様々な生き物が生息し連鎖していることにも気づかされる。

土に触れ農作物の世話をすることでレイチェル・カーソンのいう感性が引き出される。「『センス・オブ・ワンダー』＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」である。

また「『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではない」とも述べている。

（「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン 上遠恵子訳 23頁 新潮社 1996.7）

(2) 「自然に触れ学ぶ」

共生庵の環境は里山の豊かな自然に囲まれている。2000坪ほどの裏山には、かつて松茸が採れたという赤松を中心にした雑木林である。機会あるごとに共生庵訪問者にヘルメットをか



里山整備作業を終えて

ぶり、ノコや斧を持ち上げて雑木の除伐・桧の間伐・枝打ち・下草刈りなどに汗を流してもらおう。少しずつだが、人の手が入る程に明るく美しく森が生き返っていくのが分かる。隣地境界線上は常に2-3mの道が出来るようにチェーンソーで整備が続けられている。山頂までひと回りすると30分程のトレッキング・里山散策・野鳥観察・黙想等ができるようになっている。また周辺には竹藪がはびこり、手を焼いている。竹林の整備もなかなか大変だが、みんなで切り出し枝打ちして竹材を作る。山から持ち帰った炭材が十分溜まると、自分たちで作った炭窯に詰め込んで炭焼きにも挑戦する。その竹炭や木炭は囲炉裏・火鉢・バーベキューなどに利用する。良質炭は販売できる。粉炭は畑の土壌改良材に最適である。

これらはすべてひとりで行うのは困難なので、グループ体験プログラムとなる。自然の木質エネルギーの循環が視覚的・体験的に理解できるプログラムでもある。

また山からの丸太は玉切りして乾燥させ、薪割り体験の材料になり、石窯のピザ焼きや薪風呂・薪ストーブ・ロケットストーブ・キャンプファイアーなどの熱エネルギーに貴重な働きをしてくれる。その他、木片・枝・竹等を利用してハンドクラフト・木工作にも取り組むことができる。更に自然といえは共生庵の前には美波羅川が流れている。浅いので泳げないが、大小の岩・藻・葦があり水量もあるので、川遊びには幼児も楽しめる適当な河川である。小魚と戯れることが出来る。カワニナが多く生息しているので、桜並木の見物が終われば、5月後半からホテルの乱舞を鑑賞できる。近くの淵では鮒・鯉・ナマズ・オイカワなどの魚釣りも出来る。



ロケットストーブで歓談

また美しい夜空も大自然の雰囲気を感じさせてくれる。都会から比べるとはるかに星の数と輝きが違う。星空ソムリエの講師（久保礼次郎氏）を抱え

ており、天体望遠鏡でいつでも星空探検が可能。曇天で観測出来ない時は、パソコンをつかって宇宙探検の旅を楽しめる。博学で豊富な体験や知識を持つ講師の話は好評で、リピーターが出るほどである。人間は如何にちっぽけな存在かを思い知らされる。

(3) 「自他に出会う」

今やどこの地方農村地域でも、村おこし町おこしが盛んである。様々な農自然体験のプログラムが組み立てられ、趣向を凝らしたイベントも目白押しである。しかし、すぐに行き詰まってしまうケースも少なくはない。そこには体験だけで終わるイベントが多く、その後のケアが十分ではないことが共通しているようだ。

せっかく素晴らしい体験や発見をしてもその受け皿がないため、しばらくしたらそれらはやがて霧散して行く。共生庵では「農」も「自然」も導入であり、第3番目のキーワード「ひと」への導入である。ゴールは「ひと」だ。異質な他者と出会い、更に自分自身にあらためて出会い直すという事に重点を置いている。

単にいろんな体験をして面白かったで終わらず、そこで何を学び気づかされたかを振り返り、参加者同士で語り合う。そして自分自身にもあらためて向き直り、日頃のライフスタイルの歪みを修正することにつながれば、一過性のものに終わらず、体験を深め自己変革に繋がっていく。

その学びで「開発教育」の手法を用いる。みんなで気づき語り合い議論を深めていく事を重要視している。そこで次に開発教育とは何か、そのワークショップの学習方法はどんなものかを述べたい。



(4) 「開発教育」ワークショップ

開発教育について日本の専門機関「開

イスラエル・パレスチナ・日本高校生
ワークショップ

発教育協会」が次のように規定している。

開発教育は、私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動である。

※詳細はNPO法人「開発教育協会」DEARのホームページ <http://www.dear.or.jp/de/index.html> を参照。

その学習方法は「体験型・参加型」学習方法である。一方的に講義・教育するのでなく、様々なアクティビティを通して参加者が体験し、受け身でなく積極的に参加して、そこからファシリテーターに導かれながら参加者同士で気づきを分かち合う。テーマに沿って議論を深め、解決方法を探っていく。これには現代における様々なテーマが取り上げられ、多くの教材や資料がすでに発行され、常に更新されている。

共生庵ではログハウスの組み立て作業参加者の要望やその日のテーマにそってワークショップを組み立て、農自然体験からの気づきと連携させながらグループ討議等を進める。テーマは自然との共生・ヒロシマ・平和・対立から協調へ・自然環境・エネルギー問題・教育・引きこもり・コミュニケーション・国際協力、等々あらゆる分野にわたる。



ログハウスを組み立てる桃大生

ここ10年を越えて桃山学院大学の国際ボランティアグループ「らぶ&ピース」は、広島での平和学習を兼ねて毎年「共生庵スタディツアー」（2泊3日が多い）を学生自身が自主的に企画し、すべて自費でやってくる。彼らの多くがリピーターとなり、新たに自己啓発される事を求めて社会人になってからもやってくる。これにはこちらも大いに励まされている。

田植え・稲刈り・農作業・ログハウス建設等々、かなりハードな作業をしてくれる。その合間をぬって広島での平和学習の振り返りや大学におけるグループ活動の企画や組織化の課題などについて、かなり突っ込んで話し合う。

また時にはインドやインドネシアなどアジアでのワークキャンプ参加体験報告を聞く。これら一連の学びや話し合いの時にワークショップの手法を必ず用いて深めていく。これに彼らはしっかりコミットしてくれ、かなり多くの事に気づき、学んで帰っていく。そして次年度も必ず帰って来たいとってくれる。

(5) 「リトリートハウス」 Retreat House

次に共生庵のもう一つのキーワード「リトリートハウス」について記述する。

retreatとは退く・後退する・逃げるという動詞。名詞では退却（の合図）・後退、更に避難所・隠れ家など、またカトリックの黙想（期間）という意味がある。

リトリートは日常からしばらく自然の中等などに退き、静かに黙想・癒しを求めながら自らを立て直すことを示している。そういう意味で共生庵は自分らしさや人間性を取り戻す時空間を提供していると言える。気分を変えリラックスするのに日常生活から抜け出し、自然の中に身を置いて見るのが、心と体のアンバランスや歪んだライフスタイルなどを修正することに有効である。

ある時「牧師のための臨床牧会教育（CPE）研修会」を共生庵で開催した。初めての試みでどうなることかと案じていたが、7名の牧師と3名の講師・ファシリテーターを迎え豊かな学びや気づきと共に、深い癒しを与えられるという大変内容の濃い3日間を過ごすこととなった。

これには私には特別な意味があった。1998年既成の教会の枠を抜け出して、試行錯誤を重ねながら「共生庵」なるものを連れ合いと共同主宰してきた。最初からテーマを絞りこんで「これで行くんだ！」というスタンスをとらなかった。あえて言うなら「農・自然・ひと」というキーワードがあったくらい。それもずいぶん緩やかなもの。気負わず、肩をいからせず、出来るだけ自然体でやっていこう。その中でやるべき事や進むべき道筋はきっと備えられてくるだろうという思いでやってきた。

とは言うものの、ひそかな思い入れがひとつあった。自分が牧師であるということから、牧師仲間とその家族の憩いや癒しの場に用いられたいという願いだ。牧師職は大変光栄あるやり甲斐に満ちた素晴らしい仕事。他方、悩みや闘いの多い孤独な仕事であるのも事実。特に自分の思いを心開いて聴いてもらえ、語り合える牧師仲間とその場があればどんなにいいだろうと思う。

この研修会開催でその願いがズバリ叶えられたのだ。それは大きな喜びであった。「共生庵」の働きや目的を一言でどう表現するか。いろいろ模索して「これかな?」とぼんやり見えていたことが、このあたりから明確にされた形になった次第である。

即ちそれが「リトリート」というキーワードで示されたのだ。*retreat*とは静養先・避難所・隠れ家・黙想(期間)という意味もある。昨今レジャー施設等で使われる例をみることがあるが、本来は日常からしばらく退き、静養・黙想・癒しを求めながら自らを立て直す意味を持つ。我が家は文字通り質素な「庵」故に、センターというより「ハウス」の方がふさわしい。

マスコミなどから共生庵を一言で表現すれば何と書けばいいですか、と問われる。いろいろ説明している内に「農自然体験塾」等と書かれてしまうことがしばしば。「いやあ、それはちょっと違うんだけれどね」と違和感を持っていたのだが、他に適切な言葉が出てこない。そんな中でだんだんおぼろげながらも見えてきたことが、この研修会で「ああ、これだ。これだったんだあ」と明示された次第である。

時折、電話等で問い合わせがあり、いわゆる民宿か風変わりなレストランとでも勘違いしておられるケースに出会う。「一度お出かけ下さって観ていただきお話ししましょう」とお答えする。あちこちの村おこしの体験塾でもレジャー施設でもないのだ。我らが「共生庵」をこれからは「リトリート・ハウス」と呼ぼうと思った次第である。

(6) 「地球市民共育塾」

共生庵活動はすでに述べてきたようにキーワードの一農・自然・ひとを一

めぐる様々な実体験をすることと、そこから気づき・学んだ事を参加者相互で語り合い分かち合う。そして体験を肉付けしていく開発教育のワークショップの2本立てである。その2本柱をめぐって様々なメニューを準備しているが、それらすべてのプログラムを総称して「地球市民共育塾」と名付けている。



囲炉裏で夕食（米国教会から）

この意味は開発教育を学び体験することを重視した名称である。広島市内からIターンで移住する以前から取り組んできた開発教育研究会のグループ名でもあった。共生庵での多種多様な取り組みをいろんな人たちと開発教育のワークショップを切り口に深め会いたい、という願いが込められている。

他方この呼称は農村の地域社会にあって有効に働いている。

というのもキリスト教や牧師を匿名化することなく、ごく自然に公表して活動を始めるとき、まず安芸門徒の多いこの浄土真宗の地区で「この人は何者で、一体何を始めるのだろうか？」といぶかしく警戒されることが当然あったわけだ。

このことは具体的な土地建物を入手しようとする時、問われる事柄だ。ここ共生庵でも自ずと問題になっていたことが、少し後になって判明した。現在地を紹介してくれた友人の告白による。実際、気に入った物件があっても、双方の思惑・様々な条件・タイミング等が合わないとなかなか成立が困難なケースが多い。私たちが本腰を入れて物件を探し回っていた頃は、ある新興宗教がコミュニティを形成して地域住民とのトラブルで立ち退きを迫られて大きく報道されたころの記憶がまだ新しい時であった。その件とオーバーラップさせていろいろ想像し心配されていた事は否定できなかったという告白である。

共生庵の活動が始まり出すと、何かと説明が必要になる。地図・「共生庵便

り」・新聞報道・名刺などに短い言葉で表現することが求められる。その時にこの「地球市民共育塾」はどうしても落とせなかった。

ごく初期の頃地区の常会（毎月）で話題になっていた。「地球市民共育塾って何するんかいのお。」「塾と書いてあるから何か教えてくれる学習塾みたいなもんじゃろ。それならよかろうじゃない」とこんな会話がわたしの耳に聞こえてきた。この「塾」というのは、一般に受け入れられやすい概念なのだ。それ以来わたしは納得し、説明は不要だと不必要な誤解や齟齬を避けるためにも、そのままにしている。

田舎住まいは多くの発見がある広く素晴らしい世界である。しかし遠隔地である以上、都会にあるような様々な情報交換・集会・文化的催し・他者との出会い等々は当然限定されてくる。従って常に意識して広い視点をもって取り組むグローバルな感性が必要である。それを意識化するためにも「地球市民」というカテゴリーを掲げている。

ローカルに根ざし、足元の課題を大切にしながら、同時に広く世界との関係を持続させたいと願っている。従って特に海外からの来客は最優先して受け入れることにしている。共生庵の会員・昔からの友人・関西や東京のチャンネルから外国人受け入れ要請などが舞い込む。JICA（国際協力機構）・各NGO団体・YMCA・YWCA・キリスト教会関係団体・個人などが来訪し、研修・地域交流をしていく。

そこには一方通行の「教育」ではなく、相互に学び変革されていくという「共育」がワークショップを通して試みられていく。単なる場所貸しだけで利用するだけのグループは、疲れるばかりで、面白くないのでお断りしている。必ずこちらとの共生・共育というプログラムを組むようにして、共に学び合うことを心がけている。

おわりに

「ここに温泉があったら、もういうこと無いんだけどなあ」と贅沢な事を口

農村に生きる「十字架のない教会」の試み

にする事があるが、それほどに素晴らしい場所が与えられたという事である。大きからず小さからず、我々の身の丈に合った理想的な場所。長い間探し求めていた理想郷。それを「共生庵」とし、施設も中身も少しずつ更新させてバージョンアップしてきた。大体の思うことは叶えられてきたというのが現在の心境である。何かに付け「もう10年早く始めていたらなあ、若ければなあ」と思わされることはしばしばあるのだが、それとても今更どうしようもない。

今振り返って思うことは現代キリスト教(教会)へのささやかな新たな試み・提案の一つにでもなれば幸甚だという願いである。

人が自然に触れる・その中に身を置いてリトリートする・神と対座して黙想する・具体的に身体を動かして土に触れ、山に出向き、安全な食を作って食する・という身体で感じ取る感性を研ぎ澄ますことが求められているのではないか。…そんなことがもっとあちこちで自由に多様な形で展開されることが、現代社会求められていることではないか。人は心も体もバランスの取れたホリスティック (holistic) な存在である。そのためにキリスト教(教会)が率先して既成枠から解放されて農と自然に触れ、新たに他者と出会い、神と黙想し、自らがあらたに造り変えられることができる道を模索して踏み出していける動きが期待される。